



中村俊定文庫  
文庫 18  
725  
2





其儀

初便

原々、きのふに廿二の昔

七尋於達

身名あるべし  
未詳知

ホム人









澄月をいふのたといさういふを

人(二)笑(一)れけり

よほふをいふやそこの玉は木 岸雪

若菜

若菜摘取ハ本を割るうけハ 越人

草たれや玉条あつりハ妻の 百里

つらつら水玉の咲くハ菜屋ハ 冬文

聖にいふ小笠中河ハ若菜 東流

鶯

鶯やまおろしハ意おろし <sup>土才</sup> 調武子

くろし寸のちとろそんハ小笠中 岚雪

梅在耳中鶯毎ハ序はは 山川

廿袋 二

鶯のちやははちまうし 若方 侘 桐雨

梅

弱燒疎少くハやまのめく 秀和

梅乃必沉ハ射舞多ハハハハ 才磨

梅うさくハ編笠やよき 仙化

梅はは梅ハハハハハハ 治荷

七版

破(一)障(一)をちまうしハハハハ 子英

浦(一)乃(一)ち(一)ハ(一)帆(一)か(一)ハ(一)若(一)方(一) 風洗

赤(一)ち(一)も(一)ハ(一)は(一)よ(一)き(一)ハ(一)水(一)ハ(一)若(一)方(一) 月下



夕暮をよそくおちるとやちり 龍彈

柳

ゆくまのやうなうらし柳うら 山川

柳乃芽毛のそくくもさく 氷花

詠うけ目めくく心直ぬ柳か 月下

春水満四澤

こけりあき 縦泡吹はまふ 素行

春あき春風一時来

氷清く風うらむらうる車 その

接

見くくそのさかえちうく 嵐雪

とちりや核のさかえちうく 傍門

可也三

涅槃會

天人も泣鳥くくく 秘 三百

燕 飛空くく

かりくくけも下りさかえちうく 相雨

舟繰りくくくく 沖のほそく 巴山

燕休岸

土車引くくも休むつらめり 舟竹

花 上野くく

花乃さきくくい休ん常盤か 立志

女中方尼さかむか先達か 岸雪

さもくくよはくくくく 才磨

友猿のくくくくく 其角

土車 友きらひ



新のふりありくうくぬり非 調祈

ほろろ

めろろ石のくも必にけあし水 青女  
花の結ふ山や馬の川もちく 鋤立  
あやみんをそ行るふそし来せし 山  
花よりそを二つ又初より 石蓮  
むにまきく結をそりの生る水 曉雲

結あ

ふや波新の下よそ結る水海 桐雨  
退くるふより水も必砂本後分 好拵  
くれろろそよそ懺悔せん罪一 風子

結あ

良辰 四

玉のをまちは雪砂ふそつりる月下

を退る人多先にけろそ付たを

むろ中ちろそをけろまの独り 菊峯  
あまそ中男も弱くそ毒の山 百里

思夜様

あろろ中や大園様の様 けの  
下戸めろ中から水亦の山さろろ 孤屋  
葉そろりちりのそろそも様 沼荷

あふ

そろ様あろろ此ゆりやんろ山 桐雨  
汲あろろ小縁たろろささろろ水 山  
ろろ教ろろんろろ人あせ山様 一有







糸拵中々うてかりく面の上 立志  
陽方此屋之軒中乃言さか 達暑

鮎 附白魚鮎

鮎鮎に魚ハ拵乃一は角に居ぬ 才磨  
志あうらう拵も一は角に居ぬ 濁子  
白魚も乃まさうこそ海より 東雲  
志乃乃に秋の木の葉を拵籠 嵐雪

雉

一志乃も之志乃もあうぬ 雉乃乃 傍門  
志乃乃志乃乃志乃乃志乃乃 其角  
一志乃乃志乃乃志乃乃志乃乃 嵐雪

海苔

ゆくもや何やそやうそやう 其角  
海苔乃乃海苔乃乃海苔乃乃 左社  
和田乃乃海苔乃乃海苔乃乃 菊鈴  
志乃乃志乃乃志乃乃志乃乃 笠凸

寒食

志乃乃志乃乃志乃乃志乃乃 举白  
志乃乃志乃乃志乃乃志乃乃 立吟  
胸乃乃志乃乃志乃乃志乃乃 氷花  
志乃乃志乃乃志乃乃志乃乃 月下  
志乃乃志乃乃志乃乃志乃乃 言亀  
志乃乃志乃乃志乃乃志乃乃 琴風

鞆



蹴蹴のふりつらして中せ後早し

音精飯

相折民濃やうそ菜飯う那 岚雪

猫意

猫乃意端もろくはあり此之 琴風

老猫乃尾も飛し悪の五安 百里

かく猫のこをよもかろおろり亦 担風

猫乃五安あそひの貝や片とひ 秀和

猫めまろくして

猫の妻いうあろ君のくそひり 岚雪 妻

雲雀

移の木を言規よのほろそそるが 氷花

馬をさもぬいとつハニのきそな 李由  
おにうりて赤きまのまよひをな 溜橋

上己

綿とつてぬいさそりう籠の念 其角

窪園もは生力かゆ乃そあ島 露沾

障く籠入んどろり小家うれ 岚雪

娘いふをあらわ物さしこり籠 専跡

静ぬぬと物あひぬゆるふのひ那 霜白

大あり一糸の院の法教子おろして

大丸と名付ちこし中法お物ら乃

おろいひいそぬるろくそ志のふんこ

大丸子かろくせきをよき虎のあし



山崎乃松吹うて子雛花は全

妻におとよびておとよの月娘の雛とほし

主婦雛始のそとくみしきん 連暑

眉ゆくと虫喰雛の悪女うな 一口

雛乃彦を返出さくはく牙は 東雲

四日

朝霧して梅千とまの雛 曉雲

はせふも中よき雛乃松はく 笠下

辛夷

ゆき水の鳥にうりらるる 梅車

珠

疎かろくはくまらるるの 湖春

蛸ノ尾やそくね上疎乃花を 嵐蘭

上野より降りてくると

海よりそく人にかくまらるる 嵐雪

沖乃松汐さくすきを松うりは 才磨

苗代

たうらにいとくぬまのきくさ 子英

はくせんありはくはの田乃嵐 氷花

うらてさや田に中くくは 有

耕牛毎宿食倉鼠有餘糧

ふくやまの嵐の半そく牛つぐは 笠凸

くくともアんとく細歩男うね 去来

蛙



そら嵐のまつて夜あつてそらや竹槍 野水

洪ふれ観る半そら

雪ふけん桂にまゝ 流るのそら 氷花

三十三万そら

乞食もも物ろりして竹槍富夫官 六花

二階まで蛙さくおひきらるる 渭橋

蜂さくく己とあやむかりり外 和賤

蝦蟆温とくやうるるをめぐり

やうて教と蟻のやうにたをり

そらあやいぬもけなぬのそら

もそらあやいぬもけなぬのそら

けうそらあやいぬもけなぬのそら

廿三

そらーさ八鏡よむうかりり 銀鉤

春ふ

まらあやいぬもけなぬのそら 紅雪

ゆ雁

何れを田押さうついでゆき 子英

ゆらかり富すれ社田のあやう 長雅

茶

風あつてまのりるそら 杉風

そらもあやいぬもけなぬのそら 宗派

山あやいぬもけなぬのそら 月下

あやいぬもけなぬのそら 風瀑

小奴吉舟にむをそら



小坊とて是をけりけん松千五 岸雪

春州

いろくのみ子纏くつるやけり雪 紅雪

木尻あふく桂してんく此八葉 山店

おのくけ子ねのまふかく若工の 夜章

女師まらぬぬささよさし妻 舟竹

鳥早唾男たききよあし 杜英

まえんゆのおつるの月を併り産 傍門

桂えにちかりさるふちりあはれ 榎玉

とささくたにさもちるぬく桂木 榎玉

観水 魚の児えりまきのま 沾徳

知ゆく

若志振嵐 穂子 結ノレ 雪

近座ふ文らけたる 神目 友 全

稲も子をお天力 益人 屋

新妻 後々

陰るくしめりあまらん 稲の 井

伝吉ち納千の 芝 油

ぬるくしや 柿示 掃子に かくる 夢

ちかぬる 柿区の 志の ちき 柿さ ぬ

社頭時鳥 多を ちく 柿 冥 火 ぬ 子 親 涼 葉

あつ山 ちき 桂 花 出る 小 初 ぐ ぬ 景 直

焼 強 乃 敏 藤 也 穂 家 の 助 子 外 月 下







穉美ふきしかくぬれ子ら目さぬれ 嵐雪  
迂やあやみけりよらこいむる年 立吟  
まの園やまのれ業をちるちつてこ 標雲  
舎殿力梅法降し神の具

八句

料戸丸風の吹流厚いものこく  
えくくくちの鬼もこくくぬ競る不 孤屋  
道<sup>ツラ</sup>ゆきも神勅をゆりや 嵐雪  
大人子ハ<sup>ツラ</sup>子力門をちくくをて 全  
屋根の鉦矢おたのまの<sup>ツラ</sup>屋  
たつち子<sup>ツラ</sup>巻三角拍力木<sup>ツラ</sup>全

釈教附哀備

ちりかゝる花より持六力葦 東既  
六十五人決定往生  
眠<sup>ツラ</sup>やあそいおちりたは衣 氷花  
我等今日聞佛音教觀喜踊  
躍と讀誦したてまつりて  
嬉し<sup>ツラ</sup>いこと<sup>ツラ</sup>おしりおちり 嵐雪  
受持佛語作礼而已  
こゝろい<sup>ツラ</sup>ま<sup>ツラ</sup>る<sup>ツラ</sup>た<sup>ツラ</sup>の<sup>ツラ</sup>嬉し<sup>ツラ</sup> 山川  
塵點本のこゝろを  
く<sup>ツラ</sup>し<sup>ツラ</sup>の<sup>ツラ</sup>ま<sup>ツラ</sup>る<sup>ツラ</sup>や<sup>ツラ</sup>さ<sup>ツラ</sup>し<sup>ツラ</sup>も<sup>ツラ</sup>芥<sup>ツラ</sup>の<sup>ツラ</sup>中<sup>ツラ</sup>か<sup>ツラ</sup>く<sup>ツラ</sup> 全  
目之羅不能得鳥得鳥之羅

摩訶止観



唯是一目は文のころを

多きふ餅さし 鴉の尻の傍に 具角  
うた稼半法しり 枯咲よりり 雷笠

ぬり子ころく

鯨 仰りつゝ 浮きよる 舟とけ 月下

讀維平

際とやうる 芥子ハ 縁ナメ 彦良ハ 翠江  
けーの 文死大ラ 又ゆる 彦稼ハ 鋤立

應毎所住而生已心

節乃 案や けも ちあも ちあめ ち  
木言の 善ま 善ま けらま

新若 若の 新乃 若に 若に 若に 若に 百里

孟蘭盆也 ぬくくくく 老の 世 桐雨

如薪盡火滅

身乃 係や 原け せむ ぬ 秋の 身 素行  
まま ぬ 子に 傳ら 法ハ 形し 水山

殺生戒

いん せ 虫乃 命を ころし 仰り トと

邪淫戒

瓶よ 妻福 しく 中乃 ころころ

偷盜戒

切ら けぬ けぬ けぬ けぬ けぬ

妄語戒

あや しみのか けき 世を 志れ 夷海



飲酒戒

叶カヲモのいしやきやきやき

曉觀佛

睡久ぬ船もさやむ胸カ目 百里

夕聞經

唐ちの施豚鬼身に志む夕小

夜尋僧

秘妻カ紙婦信り新法海

追善

くくくや明様をくくくく鬼貫  
月カおゆるるも物たぬを才磨  
海峯カ信もまきある夕く未山

母を慕ふ

甚カクをぬくむくくく此乳原 風洗

讀九相詩

積みぬやち此陽原いさくち 年弓

十思年又年くくくくくくくく

約とりれくくくくくく 嵐雪

戀

多中まきく君よふれくくくく

約金いほくくくくくくく 百花

思ふ人を信あうてあうくくく

さう入くくくくくくくくく



つとみんあけふをさるるなうらうら  
いとあきさき

〜おや鳥のこゝとわあけ 山川

逢恨恋

我意中にもその水ぬまき鬼灯 嵐雪  
子顔おほよそきとあつしを 菊鈴  
古きうて終終小形をあり恋のま 不障  
意よまれば思賦情をよめらるるま 紅雪

後朝

そやかぬし〜し〜系つてし妻畠 水花

あ〜ぬらうにかうけてもつまらぬこよ  
抽力なき世めても意〜娘らるる 笠扇

山ぬら〜そ山よ〜きとあを娘らるるみ そ乃

〜と人をもよ〜と〜と〜とん秋乃る 去来

こい死をを望た〜と〜と〜と〜と 寸木

若年を侍

鞆ち〜鴨と〜か〜まおをおもひ 百里

君うま〜と〜つ〜と〜と〜と〜と 巴洗

四睡

海堂〜と〜と〜と〜と〜と〜と 卜宅

意を〜と〜と〜と〜と〜と〜と 不障

腮抄〜と〜と〜と〜と〜と〜と 琴風

わら〜と〜と〜と〜と〜と〜と 若年

身乃 祢依 免 老 若 年 新



秋乃 安中 室女 ぬまの お茶  
君と 此 遊 千 多 信 女 茶 小  
衣 紙 子 似 有 一 一 一 一  
さうき 衣 を 家 と 衣 一 一 一 一  
よそ ぬま 衣 不 志 一 一 一 一  
家 意 一 紙 も 一 一 一 一 一 一  
思 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

山川

全

全

全

杜 招

嵐 夕

嵐 夕

述懐

万句 毎 行 一 一

肩衣 八 庚 子 一 一 一 一 一 一  
於 人 中 一 一 一 一 一 一 一 一

杉 風

兵 角

炭 や 一 一 一 一 一 一 一 一  
百 年 の 後 一 一 一 一 一 一  
け 何 一 一 一 一 一 一 一 一  
年 の 布 一 一 一 一 一 一 一 一

僧 掃

蕭 山

普 船

一 一

煎 女 房

三 盆 子 一 一 一 一 一 一 一 一

嵐 雪

撩 山 風

年 の 一 一 一 一 一 一 一 一

月 下

遊 海 花

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

全



其袋夏之部

更衣

夕涼をもちけりもありるる露沾  
 一有 舟竹 三翁 舟竹 卜宅  
 夜之まゝに候隙のそよまゝに  
 神風やあつて 袷のあつていつも  
 當歌

青簾

五位六位をこころせよまゝすれ  
 月下 紅葉 才治  
 江上新樹

江上新樹

紫衣を博しそめこそるる才磨  
 才磨 沾荷

鶉鳩

鏡や秋多古乃福乃かんことり  
 氷花  
 舟竹 調柝  
 船花



かんことり煙を煮つゝく畠うれ 樹下

鯉

小春うまきも水ぬぬり 鯉こり 風吟

鹿下りうーいーいーいーい

可祈屋の鯉をくもむあうーいー 百里

子規

春とくまに新若きうりはあまのま 才磨  
時多何を古井乃くまの以後 露沾

新乳山の社頭上るを清く

二の三子昼終歌をぬりて 嵐雪

波の中 喧嘩 志す 梅宇 立志

くまの煙ハあを二條ぬゆて 子規 秀和

杜鰲まこけあてハさし 喜うぬ 梅川

山崎のあま

君くちのりかきうまぬゆて 桐雨

主將之法務撃英雄之心

美人小ハ彩よりちをりほく 上宅

松子休む下子いん 蜀 亮 立露

新あうくくこのいさき 氷花

二四ハ冬 後々 氷花

渡舟 氷 翠門

ほくくき 湖 翠紅

あさあい 湖水

いーくちけふくもゆーく 杜鰲 夕口



吃りてハほしくまんともやう小母 白里  
ほしくまんとはくそアタラしく有る 杜英

灌佛

つらつら此新茶よすくさういハ 音女  
灌佛や中入おたり大佛 百里  
灌佛や縁鬼子はかまのほと 卜

短夜

店乃ちあもみーくゆぬおて 岚雪

蟬

あぬか前々さふらうそ 階の雪 全  
あふらうそゆり出さし せとせ 當歌  
かひさうそゆり出さし せとせ 當歌 不一

蚊到明

蚊乃ちあふらうのまらむまらむ 新の白 沾徳  
魚の雪月大徳まらむまらむ 記 蚊乃ち 凡洗

こちあふらうのまらむまらむ

あつれよりおにんぬ 蚊乃ち 嵐雪

鉄のさうしたまらつ 葉 蚊乃ち 孤屋

蚊乃ちあふらうのまらむまらむ 衣いと 北風

さるのまらむ蚊乃ちあふらうのまらむ 川 大柳

蚊乃ちあふらうのまらむまらむ 蚊乃ち 笑種

あふらうのまらむ蚊乃ちあふらうのまらむ 音女

化しあふらうのまらむ蚊乃ちあふらうのまらむ 桐雨



城分吟

新く九城を築き市九を奪友五  
病ぬあま城をにんくろ荒引富大官白盆

心苦

いふもあしくこうしてふのほくろ介 溜橋  
河くも中を奪は是をのそきひ 月下  
奪りてぬくろくろくたるそふ 己百

渙父

兼干く新くぬくろくろくろ 崑雪

腐州堂とぬく

杜そふれふとそふぬくろくろくろ 卜宅  
とやきぬを何と志つろくろくろ 立志

ふゆく地くろくろを幣に何くろくろ 冬蟬

杜若

喉中にばふくろくろかきくろくろ 未山  
里沼のくろくろくろくろかきくろくろ 一泉  
志のぬくろくろくろくろくろ 一徳

精附川瀬

かくてんくろくろくろくろくろ 琴風  
移くろくろくろくろくろくろ 氷花  
かろくろくろくろくろくろ 湖舟  
橋橋くろくろくろくろ 舟竹

照射

弓林のまよくろくろくろ 嵐雪



端午

五月五日 端午 乃古 志  
傘をさしり 昔のころ 青女  
花衣の子 掃う雪 乃古 百里  
人らやかく 昔昔 湖水  
銅丸 桶 乃古 笠下  
伏見 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古

卯地

乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古

競馬

乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古

風

乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古

五月五日 甘

乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古  
乃古 乃古 乃古 乃古 乃古



子らるる夏の虫をもちくあり 楸下

溽暑

妻も有るもあまのあかき夏よりぬ 氷花

日かゝるるもあまのあかき夏よりぬ 信徳

孫も有るもあまのあかき夏よりぬ 細石

水も有るもあまのあかき夏よりぬ 雪江

るるの月もあまのあかき夏よりぬ 嵐雪

あまの月もあまのあかき夏よりぬ 銀雨

納涼

あまの月もあまのあかき夏よりぬ 立志

魚も有るもあまのあかき夏よりぬ 夕口

川も有るもあまのあかき夏よりぬ 紅雪

梅

あまの月もあまのあかき夏よりぬ

あまの月もあまのあかき夏よりぬ 山川

折るるもあまのあかき夏よりぬ

あまの月もあまのあかき夏よりぬ 尚白

あまの月もあまのあかき夏よりぬ 傍門

あまの月もあまのあかき夏よりぬ 笠凸

法

あまの月もあまのあかき夏よりぬ 立志

あまの月もあまのあかき夏よりぬ 調栞

あまの月もあまのあかき夏よりぬ 亀翁

あまの月もあまのあかき夏よりぬ 嵐雪







細いさき

きりぎりすのうしろり上きよ土圃は百里

夕立

ゆきくちけしつゝとらし拍りぬり

夕きりもや夕きりもや夕きりもや夕きりもや

夕たたらや夕たたらや夕たたらや夕たたらや

夕ちりや夕ちりや夕ちりや夕ちりや

ゆきもやゆきもやゆきもやゆきもや

とらし

夕きりもや夕きりもや夕きりもや夕きりもや

蓮

とらしとらしとらしとらしとらしとらしとらし

白鷺不禁塵土泥

白鷺巾着のりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

田畠に辛苦もあまきもあまきもあまきも

田畠に辛苦もあまきもあまきもあまきも

麻

機麻さうらうさうらうさうらうさうらう

いふらして紡ぎよらららららららららら

物ほららら麻刈はらららららららららら

蝸牛

かいつらり石にそらららららららららら

妍かきら女乃鬼をかいつらり

かいつらりかいつらりかいつらりかいつらり

百里

山

鬼貫

随友

隨友

隨友

隨友

隨友

隨友

隨友

隨友

隨友

隨友

菊

己

己

己

桐

杜

月

月

冰

百

月



夏衣

帷子此まき子悪ハ何のたきけを也 氷花

よしをふかろこく水子

まのな妹まぬめあてまのつゝをを 尚白

夏草

やまふまき此まき子集は力いち二不 虚洞

急くしてほろくちろくくあふひか才磨

やろくく中流少まのく守ふあやめ清風

既ちまき子をく馬齒草 笠扇

まきをんちまきをんちまきをんち

ふろく扇やかゝれまきをんちまきをんち 嵐雪

まきをんちまきをんちまきをんち 鍾立

夕影まきをんちまきをんちまきをんち

乃ほまきをんちまきをんちまきをんち 素親

まきをんちまきをんちまきをんち 為睦

光廣もまきをんちまきをんちまきをんち 年弓

一肩をまきをんちまきをんちまきをんち 湖水

咲と記の物あまきをんちまきをんち 遠水

東叡山カクまきをんちまきをんち

まきをんちまきをんちまきをんち

まきをんちまきをんちまきをんち 緑絲

池上ふか

山まきをんちまきをんちまきをんち 舟竹

男をんちまきをんちまきをんち



なま癒を並ぶる人と又く是る中 凡子  
その白き塩子ゆあしうあ子後 魚見  
その井九一まつるさし月め便 苔翠  
あさしそぬあひを麻九食角 卜と  
足ちる此言をたさく多き物 李下  
水札崎くく日教ちろつくは 一泉  
あすちをアんと角をちりかりお後多 菊白  
くぬ月にあさしそぬアきふの香 涼葉  
まろすすのちをささるうく山の中  
餘とよわしひまろるりは魚くあひ  
ふ此中をとりくちもたしうく  
さくさくしゆをアくくんえりあも

大小乃中にちんるうをささくぬ  
あ~~~~

よめ中をまろく寸かこー小餘美 具角  
ふまをまろくめろくまをくくはう 鬼貫

妻驪詣

行程二里余九橋すろくまろく  
~~~~ 且袋もくさしそおかろふ  
月あ明や~~~~ぬほく小出ぬ

首途

荊乃公祿~~~~也橋こらも 嵐雪  
日本橋右に流す丸足ゆる東藪  
山に流すまろかろくアろくそふ



乃婦らうらうら歌子居らうら  
まらうらうら歌子居らうら  
かきとぬくそ書にあること  
とて松林松林ありあり  
とて松林松林ありあり  
當歌

神ゆきとあゆめ  
勢力こころやまをうらうら  
全

増上ををたうおふきと中  
と風をきかかをを一尺  
いふふいふいふいふ  
よきとるまをいふいふ  
東海をいふいふいふ  
當歌

て万羊をを  
系代やうらうら歌子居らうら  
全

瑞雲寺

いふとくにむらうら歌子居らうら  
當歌

冬らうらうら歌子居らうら  
當歌

いふとくにむらうら歌子居らうら  
當歌

いふとくにむらうら歌子居らうら  
當歌

いふとくにむらうら歌子居らうら  
當歌







橘人乃豆詔うきふはほあり水 仙化  
大くこれ秋乃さう水やうきまもり 百里

瀬戸際飯

うき食の里健しうき際飯うけ 桐雨

宇治公十圍子

その名を折りかへし十圍子 全

茶の味焼餅

餅の味焼餅はさうき名ありあり 全

大和んじ工てさあきうきうき  
うきにまきしあつうきやうき

うきふ家も福もさうきあき

うきうきはさうきあきうき 福園女

宮川乃さうきあき

色あはれさうきあきあきあき 全

明聖

うきぬきも物さうきあきあき 全

うきうきあきあきあきあき  
うきあきあきあき

うきをさうきあきあきあき 全

伊豆本川

さうきあきあきあきあき 全

伊豆茶

山松乃さうきあきあきあき 全

うきあきあきあきあきあき 全



花乃前に顔をうつし中橋衣全

船鳴くやしらきりきりきり

新しきあふ人ふれんそそ船橋全

月一曜

たそ〜うやそのまきとらひこのま全

なつ〜をけききき

すけくやと新しきあふ〜九川柳全

お月新しきあふ〜お月新しきあふ

た〜をた〜をけきき

衣をよ〜う〜う〜う〜う〜う〜全

お月〜お月〜お月〜お月〜お月〜

け〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜全

さ〜ら〜ら〜

あ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜人乃あけ全

そ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜麻乃あけ全

法隆寺

二〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜あけ全

水玉何とや〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜あけ全

お〜入〜入〜入〜入〜入〜入〜あけ全

文月や〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜あけ全

そ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜あけ全

あ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜あけ全

あ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜あけ全

名月や〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜あけ全







草

新島工番とてある乃法うらふ大坂 来山  
新うねふてな法とてあふうか 秀和  
あさうお中片衣あふま冥冥 百里  
あううらと終る官まらうま月冠 破笠  
禪とてうらとてうらとてうらとて 杜格  
新島中後々又もうらとてうらとて 月下

魂

寺の中柳やあふも洞をあふうら 嵐雪  
魂よりうら使あふ山力このうら 湖水  
うらうたふら西ふうらうらあふら 百里  
あふうたふら西ふうらうらあふら 百里

あふうたふら西ふうらうらあふら 百里

このうらとて親よ上やたさうら 氷花  
あふうらうらあふ入おつあふうら 調柳  
施縁鬼柳あふうらあふうら 映  
孟草あふうらあふうらあふうら 滑橋  
月 附約連

水影を月ふらうらうらあふうら 佑徳  
白の月やあふうらあふうらあふうら 鉦立  
あふ月やあふうらあふうらあふうら 嵐雪  
二はう月あふうらあふうらあふうら 拳白  
あふうらあふうらあふうらあふうら 傍門  
あふうらあふうらあふうらあふうら 秀風







夕の暮らさうり此さうりも形くまをいふ山も  
くしうら力まに神さ出さやううう

さ紀九月のうしうしうさうさう

寄菊

寄二 寄菊

寄茶

寄三 寄茶

寄四

寄四 寄茶

寄蕎麥

寄五 寄蕎麥

寄六 寄蕎麥

寄六 寄蕎麥

寄七

寄七 寄蕎麥

寄八

寄八 寄蕎麥

寄九

寄九 寄蕎麥

寄九 寄蕎麥

寄十

寄十 寄蕎麥

寄十一

寄十一 寄蕎麥

寄十二

寄十二 寄蕎麥

寄十三

寄十三 寄蕎麥

寄十四

寄十四 寄蕎麥



きとも月に這わく北野急のき所 全

松千ありぬも町うらん

其十

一水一月千水千月とふ古したに

丁あつてふ少いとい九月を四

袖につふふ衣分衣月 華ッ 全

其十一 答

月ひとも振ちりぬる本乃乃ちり 全

其十二 寄芭蕉翁

ちのひのろういハ侍庵子月とあそ

あそいて去一の人ありはく一カ

侍ありはく一もさく一ふの月

とりゆりて本乃乃の庵もまうとあを

らぬよるを侍 ちり一とさく一

又月のふあえとそを庵をせぬは一は

きとあそをさく一免さく一とさく一

ふくしあつて一と一と一と一と一と

せんといふ一

けいひハ月を肥く申之るあん 全

其十三

園より降りぬ

くはくをくはくくはくはくはくはくはく 全

礎

夜半や粘るるちちちちちち 菊鈴



石打人も裸々くさす此布あり 鉦立  
草乃屋の竹ゆりるむきあふ 立志  
樵者も踏まへりし破道きぬ 山川  
まろつとものち石の小あうね 氷花  
我より物多志くさるるきぬ 巴風  
鼓やう石やうあふあふなる 仙化

野分

小まろく如や聖なるにむかふ 芳 うの  
陽りあり方おど這けのこころ 東眺  
あまきりぬちりくまは暴風 立志  
いそぐしおほららの徳のよそし星 一笑

紅葉 附著

小田かにかしけりや下もさ 秀和  
名も底のぬきあふるまらかり 八木  
片枝をさふあくのまみち 百花

遠水家の傳子

たりのこまふるまはあけり 二月橋 遠水  
蕨乃ちまよやそまきりる小るが 嵐惠

岩

まろく(粟ふも似さるる 伴自  
葉乃ちまよと志くそ風をらるる 大坂 伴自  
伊勢乃園に修めりしは 伴自  
地をとうやにこころりきるに 伴自  
携乃さうりちりるは 伴自



栞のまをまきらひてうほぬよりぬ

うほらも程依栞のまうらまある

すりしをまをまをまをまをまを

角力りやのせの形角力花房 其角

たあしつものまをまをまを

えまよりお二見へうしり栞を 芭蕉

虫

秋乃秋乃入るなるを中裸利 琴風

かまきりや芦出ふるく所の中 舟竹

えさるんを何を業よ啼ハきく 山川

さるぬぬ<sup>ヒラガ</sup>栞とやうるまのく 氷花

継しきといつちにまをまをまを 紅雪

櫛田小あうく<sup>サキ</sup>まをまをまを 風子

稻すりまのまをまをまをまを

百とととととととと

百年に一足きくぬいぬこかき 傍門

日とととととととととととととと 親の里<sup>少</sup> 孫五郎

一日二日よはにまをまをまをまを

親里のまをまをまをまをまを

夕照

蜻蛉の屋をかしゆる西日るぬ 沾荷

海風かきく 芦乃穂のく 芭蕉







投らばて破して這入をささふ立吟

病後

すまふとさふなりぬ秋のそら尚白

踊 祇園

舞ふるよて確鳥のさるふ一京千之

綿糸にふり家道ははるふ月下

桑山子

かーとてむらるるささし三徑うぬ調柳

ましとほよとくささしかー水原水

んこくをそ出来ふ出来あるかー洞呂洞

この山ー立子種のを丸くー立柳立

秋意

瀧をたて海へや秋をと田京千春

をいそしうろ歩や秋のそら雪嵐雪

秋のそら女房のほろろ尺寸なり花氷花

いそそみる人んく秋のありれ立柳立

七夕の秋あそひやあそれ尾嵐尾

秋のそら下月下

かさすりまのわたり下月下

かさすりまのわたり下月下

秋のそら舟舟行

とんいておまを舟舟行

柳乃桑山をさる舟舟行

そのあより舟舟行



榎乃かきしよしよ山の本乃こる子嵐雪

蕎麥 讀甲陽軍鑑

あらしそそ乃志乃の武士にさしホ守去来

茴香

うま乃おほらるる北朝家やうしのち桐雨

困 おもしろい出づれば

家乃ちハ何を思ふのすり思ふちト宅

あらしおまゝし人の問こゝ山の本叶加水山

新集さうり夕月よ静ぬ山はけ水卧葛

山乃ちおほらるるゆり

いこしよの小釋とさまゝしん社乃者湖水

移さぬよひて

里にたるとそなたらうしある本乃ハ全

若くまゝしうし男にあらうしめ即答 東雲

分乃部

多タ綱グ繩乃らるるしや結う幸此うう 百里

あらしも例皆のりも月夜とそ

四時をとかくしよやうそなたらうし 百花

そなたらるるにあらうしうしそなた 勇招

川きよふつまゝしよ山守かしん 團友

形網を風を思ふるゆりし 湖舟

そよしよしよあらしもいなりすま 三翁



其袋冬之効

老若くぬを病しむるに相中桶 露言

讚大黒

神カ海をちよいかし肩を守るに 嵐雪

おのけらるるとのお袋やかきぬる 山川

海きし中 海し十月の度より 未山

時ふ

雪をねはりさしぬるに 何るか 立志

子に後しる志ありしをゆ 何る 葉水

若きをたつて何れあきくにゆきえ 片雪

宗一せうり

何れあきり 聖なる子にゆきぬるに 何れ 才磨

若きをたつて 何れ 干客の志を 此小 山川

江口少

かろくさくおをるるに 何れ 何れ 宗 千之

炉

爐カ乃あや 何れ かけぬる 何れ 月下

しつとぬる 何れ 在定る 何れ 何れ 字先

中より 何れ 何れ のはカ 何れ 何れ 情門

何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 百里

小窓し 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 和賤

足袋

何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 嵐雪



草是當年也あつらふ程の草 嵐尾

本枯

こかろしに吹倒さしし一木を以て 疎木  
一丁に風やせれしつらとて葉 一有

こかろしに二木を以て以て 相雨  
本枯ふ然るを白くも本乃た名不 土鮮

ゆつくりもこころに言さき枯れ 湖風  
うたふてもまふもあつらふ山は水 原水

十月雁

こかろしにのこころもなつらう丁めを 百里  
十とろ乃風つらつこまきとてあふ 言滝

三翁

三翁 兼川のまにに居るまのくをえあき

相し居るまのくをえあき 東石

居るまのくをえあき 北鯤

居るまのくをえあき 其角

居るまのくをえあき 吟水

居るまのくをえあき 宗派

居るまのくをえあき 氷花

居るまのくをえあき 風洗

居るまのくをえあき 和賤

居るまのくをえあき 山川

居るまのくをえあき 鬼貫

帰花

知るこ中あつらふあつらふあつらふ花 鬼貫



お風をうしろ山をわたり花舟竹  
やとり木北庭をまゝしうりふ  
原より北極の白くかきりむ  
秀和

雪

初雪や中は雪やこゝろあまき皆乃花  
門乃雪白とたつみのそがく  
まろくハまろくぬ梅もくまの雪  
かきしとくにあらむはくろ雪の井  
は夕もつろり雪のくあやうも  
白雪ハ海乃程のち喰はるり  
はめくさくとまきしはきりてあけり  
一見清乃雪をなせ井の雪  
山川  
嵐雪  
調柳  
諸門  
孤屋  
月下  
湖水  
北風

初雪を此白雪とてころぬ目や  
初雪もふにあらまハたうり  
止行  
水

霜踐至堅氷

初雪ハ麻乃角もまたり  
くこくふまろくそまろく小袖まら  
宇門  
紅雪

海中

ころり雪はまきぬゆき風乃花  
竹井

霰

あつれふありひまよそちかり玉  
拳白

霜

雪乃あや中降乃まきくた  
日乃あや中降乃まきくた  
風子  
達曙



うしあはれおあまの路を江尻の  
老より七あり

お花枝子一花咲くかきし外 呂洞  
凍

田まそして益なきほを氷介 泊徳  
西念一う氷力よおあうれうね 青人  
風吹雪氷をまのいりありを 立吟  
玉手手に居るまかちのこもりか 仙若  
まの隈りそくお水やうう氷 花樸  
古体乃波きうううあも露 傍門  
語りにも凍とあーあも氷 一口  
さうくと氷のり数寸小氷介 傍門

海鼠

あつちあき海鼠そうて新若 露沾  
海鼠喰ひまきこたあいのうお傍道 嵐雲  
蛸をほくくほくうに  
路るハ石まよかーひよりあ 全

河豚ハタと鰻ウナギふよと似ておはし 鬼貫  
米にかゝるる鯛タイうまあそ

お君のさうりやあるるまの飯 山川  
とまよつとまよつと飯イハあり 氷花

半醉半醒辞 曲水  
袷アヲ半ハチ醉スイ半ハチ醒セイ辞ジ  
袷半醉半醒時え







いとわが中一を此数なりとて此年 百花

臘八

後ハ肌牛ハ胡麻喰 粟飯うぬ 紅雪

まゝお白さをとてぬくも

君アハ中一を此数なりとて此年 嵐雪

煤掃

本意ハ中一を此数なりとて此年 東順

すしとてハ暖うあらとて此年 調栞

そて竹乃世くを戸てぬ所此年 菊峯

煤とて何やうたう寸家乃角 月下

鉢扣

君とすくと下路とくふ此年 氷花

もちたき君との園をきさうナよ 傍門

節季候

せきとて中一を此数なりとて此年 山トト

衣配

衣とて中一を此数なりとて此年 全

歳暮

年乃とて中一を此数なりとて此年 月下

系虫の石臼をたると此年 楸下

古層はけし人小空とて此年 嵐雪

世話

二月十七日 秋後山を歩くと

徳











ふつと一擧乃ちを干すいとゆらと琴風

鶉鷲鸞鶉鶉鶉鶉鶉鶉

うらうらんと時々の懐く赤屋三列菊峯

敷書

頬かきこくはあらくれ不軍舟竹

潘安仁

吾に存をさし花袖うね全

桂姫女

吾かしく少り中二ををたはしなり全

七福神

寄辨才天猛

おろしとみおし出せせん是再さ琴風

寄惠比壽鯛

撰鯛 冬もくくしにうらうら下全

寄大黒龍

喜乃顔のこくま一白のくま全

寄妻走人麻

角屋くわとんや中存の麻全

寄福祿壽杖

ゆらゆらやうかぬ窓の介杖全

寄布袋蝶

いしや棟たよりきあきもあきの袖全

寄毘沙門絆

糸あそび甲れ星う降のうけ全



七小町

山平

あゝあゝとやなやむけとんてい

その紙洗

うささる中枯もんーその下

通

おりのいあるんありけ中雪の雪全

卒都婆

あゝあゝとやなやむけとんてい

冥土

七二ー小うちをかしきかろく

齋齋

しー中船の少さるる梨力船全

信る

と年獲り小所りる世守り全

かおのつーきおし後をかえて

すのうちうりかよひんあそひ

是乃血戸本所サナに梨りん本情紙山川

月乃夜

さー是も月に目あそふ

圖

と年乃夜や細工ころ取し楯の割キリ全

雨乃夜

暮よたけ香れころ夜そさるうち全



風から抜

こか〜もあつれいひゆけおの眠全

目る 足すよん帯刀も取〜小ぬ志うれ全

志ふあき

つ〜あての志の足福君も足と全

廻文

松乃木のやまやと角は〜新乃美ト栄  
なり〜つ浪あ〜〜これ〜〜か氷花

味淳くそをさおあり松と花

立志

山掛乃首を擡るおゆる事 嵐雪

風通ふ水室れおとあ〜〜不 脚立

床よりと〜〜松乃い〜〜子 志

照月ハ雪乃柳東母そ 雪

衛<sup>ヒヤク</sup>美<sup>キ</sup>さうりう〜〜おのてたうさ 立

多<sup>タ</sup>てぬ意<sup>イ</sup>練<sup>レン</sup>乃<sup>ノ</sup>袴<sup>ハカマ</sup>の<sup>ノ</sup>袖<sup>スリーブ</sup>乃<sup>ノ</sup>四<sup>ヨ</sup>さ 志

悪<sup>アク</sup>いたとこと〜〜り〜〜以後 雪

汝乃白を風呂巾の襟の名は〜〜 立

又乙雪と〜〜〜〜〜水 志







袖うして様たちを不況齋相秀  
文らうけし水雪自れり立

望くち越をは根乃流を折式

举白

大葉乃茶摘小葉をいりて

嵐雪

より之際廻を己らるりて

李下

新り干以結を風若一葉

氷花

約瓶井のよりつくと月乃秋

雪

人乃刈 乃後乃乃きふ糸綿

白

蒲の穂乃ほくそもつと乃健

花

櫛ぬらうさあかろう

下

年をうてうつと海いゆりて

白

冴 冴も勇若城と志乃も此

雪

百<sup>モ</sup>分の<sup>タ</sup>をうりて水乃<sup>タ</sup>筑<sup>タ</sup>川

下

芽もにをうりて大割若材

花

乃并に<sup>タ</sup>芽<sup>タ</sup>牛もうりて流也

雪

そ<sup>タ</sup>子<sup>タ</sup>月<sup>タ</sup>子<sup>タ</sup>刺<sup>タ</sup>入<sup>タ</sup>定

白

星乃<sup>タ</sup>積<sup>タ</sup>心<sup>タ</sup>海<sup>タ</sup>を<sup>タ</sup>解<sup>タ</sup>ふ<sup>タ</sup>も

花

此<sup>タ</sup>乃<sup>タ</sup>い<sup>タ</sup>合<sup>タ</sup>せ<sup>タ</sup>人<sup>タ</sup>も<sup>タ</sup>知<sup>タ</sup>る

下

糸乃<sup>タ</sup>ふ<sup>タ</sup>お<sup>タ</sup>の<sup>タ</sup>い<sup>タ</sup>を<sup>タ</sup>控<sup>タ</sup>る<sup>タ</sup>終<sup>タ</sup>金<sup>タ</sup>屋

白

月も<sup>タ</sup>こ<sup>タ</sup>こ<sup>タ</sup>ゆ<sup>タ</sup>る<sup>タ</sup>乃<sup>タ</sup>下<sup>タ</sup>所

雪

大魚乃<sup>タ</sup>信<sup>タ</sup>川<sup>タ</sup>踊<sup>タ</sup>る<sup>タ</sup>乃<sup>タ</sup>鏡<sup>タ</sup>以<sup>タ</sup>

下



上に志とくふ草花をうらも  
つち形ふやと志の心秤  
情をうらとていふぬ石麻  
胸を割かいらをうらも酒の露  
ねをゆるおろ敷る責  
不といもぬりも人九涼  
かゝかさういも君も同  
うきあをよゆりふ守候  
日あゝいもぬりぬる油  
乙蕚に油煙了下此きう月  
蝶蚌もぬるをたう心戸袋  
秋風よまらうらうらも肩  
花

之世うらうらいよらう  
下  
下かゝりて車も通せ腐橋  
星葉照る心祐若 終る  
茶室のうらうら 匠鏡波 壺  
下  
うらやうらうら此園風 以 後  
花

風よや男望 翻 非 女  
立吟  
うられ下いんと腐をてたう  
かゝりていもぬる心あ  
あうらうら此心 壺  
吟 全 嵐 雪



















大しや戸ぬる喜此あちほり  
臨すと峰々一集力り雪  
くまひ雪うとさうを捨小磯抱  
沖力るのりに海松をり  
玉つくり難波にまゝ正古歌  
塚のちうくも山子 瑞花  
を信力るる庭つまゝる妻の月  
掃雪あな店子袖ひくはる  
船小磯靴千睡るを世はうり  
雪月の依りて法山をり  
けりあまあそぬ涙もかゝる  
甘芳雪此下磨 月日こゝりあま  
角

深ふもやとすりくまのま  
お等んうり 経るまなくや  
雪里

岸かゝらるるさ妹、涙うぬ  
くまひ子や雪此寝る門立  
猶月此梅花ハ熟る中くに  
あけり力り砂履るいそり  
まゝりくと峰々や疎をまゝり  
と雪も層力る多あてこゝり  
桔梗あちあち此雪の形は  
秀和  
舟竹  
嵐雪  
和  
雪  
竹  
和



親志<sup>シ</sup>くま<sup>シ</sup>とて<sup>シ</sup>松<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>泣<sup>ク</sup>め<sup>ル</sup>  
 人<sup>ノ</sup>力<sup>ヲ</sup>信<sup>ジ</sup>よ<sup>ク</sup>か<sup>リ</sup>く<sup>シ</sup>一<sup>ニ</sup>女<sup>ノ</sup>妻<sup>ト</sup>  
 目<sup>ノ</sup>底<sup>ニ</sup>を<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>夫<sup>ノ</sup>力<sup>ヲ</sup>賢<sup>ク</sup>信<sup>ジ</sup>  
 灌<sup>ル</sup>佛<sup>ト</sup>を<sup>シ</sup>多<sup>ク</sup>持<sup>テ</sup>奉<sup>ル</sup>お<sup>の</sup>心<sup>ヲ</sup>  
 逢<sup>フ</sup>く<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>力<sup>ヲ</sup>く<sup>シ</sup>後<sup>ニ</sup>叙<sup>ス</sup>  
 破<sup>レ</sup>石<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>層<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>人<sup>ノ</sup>に<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>ハ  
 繁<sup>ク</sup>力<sup>ヲ</sup>落<sup>ク</sup>と<sup>シ</sup>長<sup>ク</sup>生<sup>ク</sup>若<sup>ク</sup>性<sup>ト</sup>  
 三<sup>ノ</sup>々<sup>ノ</sup>困<sup>ル</sup>我<sup>ノ</sup>流<sup>ル</sup>ふ<sup>カ</sup>ぬ<sup>シ</sup>洛<sup>ノ</sup>々<sup>ノ</sup>  
 暮<sup>ク</sup>黄<sup>ク</sup>野<sup>ノ</sup>了<sup>ル</sup>了<sup>ル</sup>月<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>ル</sup>  
 云<sup>ク</sup>力<sup>ヲ</sup>奇<sup>ク</sup>醒<sup>ル</sup>井<sup>ノ</sup>條<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>書<sup>ク</sup>ま<sup>シ</sup>あ  
 老<sup>ク</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>善<sup>ク</sup>人<sup>ノ</sup>天<sup>ノ</sup>穿<sup>ク</sup>力<sup>ヲ</sup>吟<sup>ム</sup>  
 衣<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>る<sup>中</sup>肉<sup>ノ</sup>障<sup>ル</sup>ん<sup>ど</sup>立<sup>ッ</sup>つ<sup>と</sup>ぬ  
 和<sup>雪</sup>竹<sup>和</sup>雪<sup>竹</sup>和<sup>雪</sup>竹<sup>和</sup>雪<sup>竹</sup>和<sup>雪</sup>竹<sup>和</sup>雪<sup>竹</sup>

財<sup>ノ</sup>心<sup>ヲ</sup>さ<sup>シ</sup>き<sup>ク</sup>者<sup>ノ</sup>く<sup>シ</sup>そ<sup>レ</sup>赤<sup>ツ</sup>  
 腰<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>早<sup>ク</sup>信<sup>ジ</sup>あ<sup>ル</sup>後<sup>ニ</sup>向<sup>ク</sup>  
 こ<sup>の</sup>め<sup>か</sup>か<sup>し</sup>その<sup>人</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>  
 研<sup>ル</sup>尾<sup>ノ</sup>力<sup>ヲ</sup>勢<sup>ノ</sup>め<sup>と</sup>と<sup>シ</sup>中<sup>ノ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>  
 車<sup>ノ</sup>せ<sup>く</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>  
 壹<sup>ノ</sup>冬<sup>ノ</sup>伍<sup>ノ</sup>も<sup>ろ</sup>ハ<sup>流</sup>出<sup>ッ</sup>く<sup>シ</sup>り  
 伝<sup>ル</sup>あ<sup>ル</sup>男<sup>ノ</sup>先<sup>ノ</sup>力<sup>ヲ</sup>小<sup>お</sup>と<sup>く</sup>  
 一<sup>つ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>  
 あ<sup>ら</sup>事<sup>ヲ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>  
 節<sup>ノ</sup>季<sup>ノ</sup>は<sup>力</sup>既<sup>ノ</sup>の<sup>州</sup>力<sup>ヲ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>  
 銀<sup>ノ</sup>力<sup>ヲ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>  
 和<sup>雪</sup>竹<sup>和</sup>雪<sup>竹</sup>和<sup>雪</sup>竹<sup>和</sup>雪<sup>竹</sup>和<sup>雪</sup>竹<sup>和</sup>雪<sup>竹</sup>







至乃麻曉 夢い 至 祈 あり 雪  
子かりあり 此 終 あり あり あり 雨  
此 終 あり あり あり あり あり 下  
仙頂 終 あり あり あり あり あり 雪  
津 至 あり あり あり あり あり 雨  
赤 一 代 あり あり あり あり あり 下  
白川 あり あり あり あり あり 雪  
黒 あり あり あり あり あり 雨  
松 枝 あり あり あり あり あり 下  
小 あり あり あり あり あり 雪  
云 あり あり あり あり あり 雨  
終 あり あり あり あり あり 下

十六 あり あり あり あり あり 雪  
竹 あり あり あり あり あり 雨  
陣 下 北 田 所 あり あり あり あり あり 下  
法 あり あり あり あり あり 雪  
葱 あり あり あり あり あり 雨  
あり あり あり あり あり 下  
去 あり あり あり あり あり 雪  
限 あり あり あり あり あり 雨



元禄三年  
庚午の夏



油使

非難のたまの童子よき来よと芭蕉老人のしと  
まじしとのみせの人の私私を司る事をふくめるは  
口けらるるなるふらふとさう油しを先師ふれ  
しとさくき業修ぬを教トするも識者の人ぞお  
ゆゑ一時の權とさくさくおつり輸入のふとさめく  
後表のふとさくさく妙所の真よとさくさくさく  
らへり要道也其のねとさくさく門人ふらふらふらふ  
さる地あり余温貞徳のい道の程ふれとさくさく  
ふとさくさくさく流むの異ふれとさくさく来者は芭蕉

翁を以て人事も油とさくさく流ししれ往年の乞  
ひ今年の非とあり今年の花と来年の芭蕉とん  
てん成まきへ娘とあり人とのふとさくさくさくさく

元禄十二元集己卯春正月

四方即朱松也



世にこれを通うけくはありしか

定家卿

法眼季吟美門乃句ありとわく人のつる  
とく心乃升よつるれり

世を南むわくそとるるは 守成

晋其角曰若く集く群世ととれと神威  
の正統とくは境をゆく通すましく鳴呼と

一時の勢とく人としてそあつらん

是を是とくつる花乃よし世心 貞室

花んせむとくあつるひうり堂 貞徳

花乃香をぬすくそくつる花う那 宗鑑

はくしやく

世の中の字依八幡よそふの時 宗因

花乃を鐘ハ上野う法くさう 芭蕉

詞以書可用情以新為先と定家卿ハ云

しよひ心若く換骨奪胎乃法を立るる

難うつるし俳諧ハ平話乃あつるしを

本意よりくあつる古人ハしをを引ひ

すやくせ成翁乃ふるまきしと窮巷僻地

よ大傾活の艶言舞妓乃荒唐俚語俗詞



多し終て俳諧多しといはれぬの魔よあらう  
このまじりてよりけきを借よ門くまを  
事なりふ事なれいしをこそ是といはれ  
り非とせむふもひくまのこのののの詞  
いあゝゝゝゝゝも情致いふもぬるゝ

○句成るる事字眼を要いぬ

あ門のこや吹浦うまゝくゆゝ深と  
中いひ吹の字よあゝりくゆゝ深とせし  
よりとていゝをせし種乃字を去るゝ  
後句とかもつる口借と或人のつりまゝ

隆淵明の詩の神よゝゝ千古乃名ある事  
解集有佳色といふ佳乃字ありとせし  
撰集のぬゝゝゝ事なりあゝ集をす  
やゝ余よ句ををゝおゝ色蒼弱乃長句  
やゝとせ

明月や海よむゝの七小冊

やゝまゝをいゝゝゝゝとて同ゝゝ小冊  
ハ湖色乃ぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
られゝゝけゝの歌把西湖比西子濃也相宜  
東のつれ例よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ看過



まじい車まのけはまよく撰者といわれむと見  
東のさきとあり佛もくいつくせん歌を罪ま  
そのいまはとは聖者の歌あるまや

○名人の古事まをまめくは古人の力をうけく  
勺中ままのちまわりけは中人がよのゆえ  
くくくくくく先人のま餘くくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく

三升まの門まくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
卯の花やくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

初くくくくくくくくくくくくくく  
是は古詩古歌本親物語をとりくくくく  
あやまるとくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
あまのりまわとやうくくくくくく  
まままままままままままま

○名所のうをまの事まくくくくくく  
流る遠愁外舊山青とまままま  
まままままままままままま



つらみの新よとおもひしとく美草奴のきん  
しつれと先寒乃そくしんてあひの中又絶さ  
あれはあり

旅風や羨もそくしんも不破乃園 とく

きんてあひくさの積るや小砂々炭 去来

うく拵やるも餅くくそ律乃心 其角

以類鳥獲くちうくにも動くさうはし

あふをを氣胃互見乃法ありとせよつこふ くさ

といあやまきり錯綜轉倒乃法あるを

紅指啄餘鬚粉粒碧梧樓尤鳳凰枝とらる

白法よも似たり

梅々青々の門と日乃出るさな

けり餘を乃散るるよく句中を乃字を

あれとそ及よもそくさくしんてあひの中又絶さ

乃法よのくさ杜甫兼葭乃題くく暫時

雪載花幾處葉沈波林和靖く梅乃結よ

横斜疎影水浅深暗香浮動月黄昏兼

葭といふは梅といふはされと吟者それとく

あり是れ其の法あり







夕靄又波弁乃遠なる小家なる  
丹山  
 佛より衣更よをわらうら  
一本  
 藤乃葉よ望色よる田植うれ  
可陰  
 草種や花乃あうりを養ありく  
芭蕉  
 家新ひ家口五六乃中よ家  
朱州  
 木さうわ乃うねらぬをり遊上  
万乎  
 羊乃葉の新よつとまこく娘乃風  
紫道  
 作向よこくもわくや花乃足  
七方  
 船香乃詠灯く物る田畠  
帆社  
 いふはまやいりまよりうきをぬい

深川の八首

呆若く雪乃袋や投頭巾  
 かり餅乃見や油よの香見成  
 草庵とありくと年乃炭大根  
 ふうふまときくぬく遊く嘘うれ  
 ○感情よりいふ句は情多しとく  
 感情をよみ  
 やんせうらむらむらハ詠  
 情多しとく  
 案まきぬく本情ハ疑さし  
 似く易く詠ふハ  
 やまこしハ似くし  
 今ハ目眼茶をいひ  
 空  
 排を強うれをこのむも  
 け事さう周詩ハ多



感懐より興まるる五捨の其人よりあはる

源川田園のけ

昔や見も又家友あはる  
志し業より候れく家いそとれ  
そとては業より何よりなれや  
義虫乃家い強くくふも  
芭蕉  
朱拙  
路園  
風美

崎陽の詠癖のけ

故市とも今ハかり藤や浮り  
松風も笑ひ浮世ののかり  
月日をもちくくふ年より  
去来  
支考  
智月

昔家よりほくも海あり中より  
心やわりのる屋も様も松より  
おもしろや業より冷面より  
大  
飛竹  
乙  
今日向  
又行  
芝  
とて成

源川舊庵より入る

昔よりよはるくも松乃終道とも  
惟妙

○年白の業先よりつくりけくくも  
舟をもち一といひといひ又業乃も  
く白乃との形古をかつりんよとい  
いよりより陣表乃人を表ゆると  
去るより白の風ありといひ生優乃







遠く唐菜も蝦乃森是外  
昔も麦切乃先一口や中一平れ  
杜宇の鳴やら波乃三川車  
見し乃勺の南學よふりも清のわらん  
とのそん家因をくく南學よ生くく流  
紙乃相くけくまや充くも南よを風  
陸の根抵乃わくはか  
○李白くけ介の風流を切く道よたくと  
宋儒の評せられく大槓を執くく自こえ  
るり性起る諸品よ踏く句をくくくさ

くもくあくくよさくはく内くくく  
介もあつくくくくく生乃くおをた  
めくくくこのおくを埃をひくくく及  
南那乃考く遠く  
本もくく人考く世考乃評くま 惟然  
二本考くま  
先菜乃多い所く花乃ま  
松くくくく  
松くく月あま星も考く死  
源川乃干るく



おのよき由にわづらばらぬまもちき  
あし一白くくくく奇数金よりのりりりりり  
るるる地獄天道のきり入の心ある人  
○南都の鳥も黒く日向の鷲も白く呼  
鐘に入来せよと云ふ子長あやし  
とて天下歴流の功ありとてり風持ハ心  
の教あるなり

下系をよくやく大難の辨か 支州  
名護屋よりく  
世を旅し代うく小田の形是 芭蕉

○酒をうとくと若無乃りくくく依道と  
調子ある人し句中言弁乃ちと格弁乃  
を志ゆるものなり

うそはれい様くまひう様のい様  
**紅** 紅葉の初ら夜なる酒の燄 其角  
門人乃吟中以類多し依道乃詩若つある

その合く乃りくくくくあはれ  
○よる乃りもる薄も和をくくくくくくくく

活 苑 今 織 錦 山石  
つらりと居乃帰はふるさく 季吟



今織錦の法花勿論よく武後花傍陽花  
やうにもよきるるる一ゆき一を扱たるる口  
さうとていふも御は

都をいふもよきと出し一ゆき花風そよよ白川の園  
錦江春色逐人来 巫峡清秋万壑哀  
老杜のよきも御は能因ふ及ふいとま

◎ 山乃さうよきありてんこ 斜嶺亭こく  
さうゆきとよふの樹のよきの屋根 斜嶺  
大さうの山乃よき乃なる大 如杉  
一乃乃 住事ハ表よきとゆりて 芭蕉

まてやけ才三を千餘句やて廿一と後彦  
の志ありさうとていふよきとれさうと具  
連名乃かよきをすめぬ賈嶋ハ推敲乃二まよ  
ふやとよ位上人の風よよひく乃よみ文字よ法  
こよきよとて難波乃西鶴の一日二万句の主よ  
より事ありてく人もあささる二万弱とふさうり  
しるこれとてよわ風雅乃替者多れハカふ  
やまふく人あるとはまよきとて西鶴  
ふ粉をりていよきとあつて風流なるよき由  
本風雅乃根基なるよき白風流をゆりて



風狂ふくまふとほろあつてしとまきうふ  
しそくいの二まをのふ一保さううしめく  
せぬの風狂たりねるを教ふあつと一生を  
差すあつとねるあつと一保さううしめく  
しとまきうふとほろあつてしとまきうふ  
とまきうふとほろあつてしとまきうふ  
ねるを教ふあつと一生を  
あつと一生を  
あつと一生を

吾文通乃句

去来いつところ津所乃聖教法 其南

うまきとく心くまきつほくまき  
あやちりく木やむ人乃眉の上 嵐雪  
くハ之聖中乃里やむくまき 風國  
くハ之聖中乃里やむくまき 正秀  
くハ之聖中乃里やむくまき 土芳

東武吟歌

くハ之聖中乃里やむくまき 惟然

延傳

くハ之聖中乃里やむくまき 風士  
くハ之聖中乃里やむくまき 支考



海々乃願 乃やるまの了れ 朱批

偶作

その中ハさくハ雀乃論おけふ由

維乃唱松子ノ教のくくノる 素 素

諸方乃百十八樓の能あり略之

芭蕉志人乃遺稿もよろひ好ま乃許より

勝もよるハ洛乃凡国泊和集よ出しくん

やうひうの賛まの伊陽ハ着乃熟地まれハ

ましくハち方後館のいれ跡ましくあたるよ

よあちがくふまのくく大むの鳥有したたり

うらとまけ歌他をおくゆふのくまの如  
つゝ追加せし

戌七月廿八日 後維亭

夜席

あましくくす糸ハ海乃聖分代 後維

痛乃かいらをあくま粟乃穂 芭蕉

物月軟駕よ漸 追はんく 配力

糸乃煙了くハ暖 簾の綴 重翠

かつくろいと揚をくくハ雜乃死 土若

窮屋さくくよとく白なるたり 卓袋



燭臺乃小キ家ノカクヤクク  
 名主と比下と立分ヨ判  
 焼りしワリク中つりく  
 おもひく川さん出ぬくか  
 けろつハ扉ノ要仕るひー  
 湖ありかそく月をんそい  
 脇指乃小尻乃房をぬくえ  
 相撲よまけく言事もかー  
 心張ハ心付村のひしう人  
 く川まかそく新乃坪の果  
 袋 箱 力 苔 蕨

焼きくく柴火工新色乃花  
 大くくさうんま乃風すー  
 坪割乃川除乃石つあけく  
 日あさくく風中り合  
 大名乃供のまそ乃そくもふた  
 むいひ乃かろ乃おとる血の乃  
 一拜の代を指く来ぬ酒乃箱  
 鹽のそこ乃あれくくまれ  
 焼乃葦を細工乃表ハ文く  
 網の度乃くそく乃先  
 力 芳 蕨 箱 帷 力 蕨



帯本ハまうぬくまうぬく最る人  
干惟子乃去れ三日月  
神主ハ御供をたぐわく  
去りてく岸に休む衆士  
夜更之縁すれ心志のあり  
加をへ這入る園乃別と  
年體をそくく根又接し  
初香乃つた備六人  
久りて指引あくる花の法  
菜乃潤子れとそくくた  
獲

とる瓜店より

定菜や小糖乃か瓜白乃備 芭蕉  
抱く素坊をく大根 有坂  
互冬ハ瓜を糖をそくく  
門より良瓜の月乃そくく  
重りて始乃丹毒のそくく  
以一首ハ粟乃御奉頁  
七十の物をよろくそくく  
三尺通り裏乃そくく 掛坂  
涼くそくく登田の出張よくそくく 甚



怪な牛の方肥 体むる 坡  
 里深々寺の男のこころ入 坡  
 其日と病る 旅の夢外 坡  
 押巻る師を乃口を喰ふと 坡  
 端と端をつらと必を主篇 坡  
 田乃中と極る乃の多野り 坡  
 芝と乃ははく月おろるあ 坡  
 花乃時祖又の月か度さる 坡  
 依くまうの妻乃の義と 坡  
 度危し書の時深を引く 坡

遠望る子乃よとる居と 坡  
 裏合を根鞭乃くも 藪の岸 坡  
 切乃あを依いし心 霜と死 坡  
 也々奇く牙の足怪乃過う 坡  
 泣く酒のむ糸物乃ま 坡  
 とうとうと横と風乃苗る者 坡  
 綿盗人乃繩をよや 坡  
 月見をハ靴と不足の出来ん 坡  
 とをさくをハ何ふハ何やら 坡  
 伍と別あるるりハ 珠結と 坡











この巻の何れに何れを  
巻の直名を何れに  
此の序あり

附録

爰に附録せる篇を稿の表々は  
先めとし七部拾遺と題して  
世より所のたししと云はば  
字部拾遺の七部拾遺を小刻に  
しあつてひと云は七部拾遺  
の表をかかむらせは少は  
此の表をこを拾遺とすし  
此の表に如く付すのみ

とある人を  
人



しつゝいひらぬ七部抄  
の巻をかむらせ長少は今  
此の巻こそ捨つるましのび  
巻の後に如く付すのみ  
と申す人識

をよむゆゑのうらなひは  
もとけしとく増しき事と心  
みとあゝ多連句七巻乃  
くぬもの成ゆるるまはけ  
此道よるまはけとせられたる



あしと草堂牛朱のぬらさ  
稱しとあふふ筆も紙抄ゆか  
事しあふ祭

くぬここと

古化居士

ありかたよきものぬらさといふと  
かた清女乃書ししぬらさ  
星表のおくぬらさるぬらさ  
今もとぬらさの集編の事ハ  
陵の生か砂乃ぬらさくぬらさ  
し指を砂さるぬらさのしし  
ひそらに風化房しぬらさ  
七津ぬらさとぬらさをぬらさく



株をちねひくは後麻乃  
喰ひ破らる古きを打らるも坊  
是ら後編とては好み土志  
助やせんしとをねふ乃こ

草坊

車草蓋

此序普通の本よりなる  
たれは是ありて  
うりては重なる

種草中草乃をまき美ありぐ  
まじりし草ハ風かきし  
保好なりしはを美書て  
殺入るる草の名も  
青みの七ツ起たる草信り  
ひさこねれを付後し  
新屋より株の戸をく  
小信のくしり口をくす  
やまくと夫洲のいふの

草

羊

土

品

残

弱

品

草

草



多美乃抄子もりのこころ  
 女籠の男も抄子もりのこころ  
 人より美しく情名はこころ  
 萱州乃ともこころぬきこころ  
 抄子川 抄子川 抄子川 抄子川  
 月夜もそそる根すくさのき  
 ちほひもそそる根すくさのき  
 氣取入るの多條は笑ひこ  
 後乃 写すも水乃多り先  
 描入月のさつ 梓枝子四ツ糸く

あま乃ともこころの織草苗を切  
 かこもも痛人あまハかこもこ  
 ちこささやひも出る愛結ひ  
 やりくは絆居の形をさあ  
 ちこ乃あまこころ物まのひ  
 けまこともよもこころあまこころ  
 中こえ抜もあまかりこころ  
 朝夕は寝ひ乃多美は寝ひ  
 つくあまそれたれ神くさ乃荒  
 田原のひもあまの月夜



風ひえ初ら牛の子乃施為  
 其の志くれ越乃裂感神もぬ  
 志なきハ人の何一て成へなき  
 邪風を以て却るるもいかゞぬ  
 名をたそはせと追ふ事出さ  
 志くくとひく人の志も持む心  
 志なきとそはせと追ふ事出さ  
 品

拾四

風流乃まきしとてやけしなは  
 藤まき藤子卯の志乃し  
 砂川よひしとて双金の傾く  
 門遠くとて醫者の麻おさ  
 月乃おとす志ぬたも志のく  
 志なき而瓜も今ハ凍しき  
 庫裏焼のよとまのくも無の中  
 ぬくひく門と志む六尺  
 之つ月より人も志む心焚くも

涼葉 芭蕉 青山 曾良 濁子 嵐蘭 岱水 怒誰 片雪



心もろれ候多ふ名とす 葉  
 行燈とてそと 萩と強し合 蕨  
 本質泊りハ石籠走らまは 山  
 入萩も細く高野乃朝の月 良  
 垣と若くしく 漱き流人 子  
 小籠の又派送す 村徒 誰  
 いそよ 刺友居やとららん 葉  
 寺乃 櫓木を流きと 言水 出  
 入袖も田畑を 似そく 竹籠 泉

流るとすハと今更ハ 君 去  
 去くぬ 蕨人 参乃 葉 不 山  
 又年くしく 強居く 一 葉 山  
 火桶す 蕨の 萩の 葉は 流く 子  
 蕨葉の 萩く 一 萩の 葉 葉  
 蕨の 萩の 萩も 掃て 於めん 葉  
 萩の 萩の 萩の 萩の 萩の 葉  
 先日 萩の 萩の 萩の 萩の 萩の 葉  
 萩の 萩の 萩の 萩の 萩の 葉



備前連く小舟よ色山  
栢の尾房さけくをの童  
碓井乃岩く砂る足石  
曳後をうに中とやまはく  
横屋まきふ海のまきう  
やままき岩とほる花のま  
葉と岩よまうんふ舞ま  
る

格八

夕暮や美し場をくる其方  
西日をうせく敷乃下  
ちりくしは雨の勢のつ  
る乃まきりハこる人  
一葉の残る酒常ふ昏の  
稗くノ桂夢うそをの坊  
お草も小傳わさねさ  
けさゆれ早も人よか  
巻す乃けりまふ跡石の  
有 翁 惟 風 花 何 山 翁 翁







日やけ島も上田乃か来星  
 夏乃秋も唯くそ河る毎う春  
 嵐かありく智とりく行  
 辰家ハみの中ても言はく  
 月あよりおとる 櫻 始  
 びくくく花子日ら響りるう後 行  
 ちくくくあうまよりおとる 色

記念歌  
 よるか

幼草やまご日殺ゆめ秋の色 芭蕉  
 青きさるる 湯 谷 川 岱水  
 ちかより居村の勢地定りく 史邦  
 くくく月小 蓋 籠 乃 蓋 半落  
 塩付く 鯉 吟 久 経 の 草 枕 嵐 菊  
 あくくくくく 草 乃 引 とも 蕉  
 年 亥 ハ 土 持 ち 守 夕 暮 名 水  
 沼 傍 乃 落 温 泉 子 洗 入 る の 春 邦  
 赤 土 苗 の 葉 と 只 並 ぶ 乃 上 原



中〜〜〜〜〜  
何れれの浦雲は君丸く輝く  
物事〜〜〜〜〜  
月〜〜〜〜〜  
子稻の傍ふやめく刈たる  
胸〜〜〜〜〜  
畚〜〜〜〜〜  
茶の〜〜〜〜〜  
伊〜〜〜〜〜  
妻〜〜〜〜〜

拾九

の〜〜〜〜伊丹流白  
流疎子〜〜乃表く  
是非は〜〜上〜  
見〜〜〜〜  
入〜〜〜〜  
袖〜〜〜〜  
月〜〜〜〜  
子〜〜〜〜  
公事〜〜〜〜  
事〜〜〜〜



月も白く照らす一歩の目も  
 出度と云ふ隠居のゆくゆく  
 千代ついで中々暮途乃朝  
 小枝のまじりてそよと云ふ  
 結着とかなと板妻のく  
 人懐く色利細川の系  
 舟も異なり船子の舟  
 葉 水 葉 葉 邦 落

俗  
 十

久遠中一歩ゆくくと初を産 去来  
 核たるをを誘ひ越え 芭蕉  
 借ハ世守様の居様をく 其角  
 ようと口きく一瓶乃酒 嵐雪  
 月明く灯火をさ海の上 蕉  
 伴乃をく吹秋乃言 来  
 牛蠅子拾持てく羽織を 雪  
 友位あそびて女石供を 角  
 挑灯は火籠帽乃言 来



中形より下る文の扱本蕉  
を後りと算より寺の背戸角  
つむよ余る後ま押し言  
仇人乃みふかくと氏と扱蕉  
ゆゑけしる業言乃言末  
美ま後昔後うの皆よ言  
措やせし外乃月歌角  
夏加まよ後余すはふか後え末  
毛種としは去西の初り蕉  
ころゆら庭の下り十百家角

器十一

何れ何樹そ碎さあ乃月言  
けうくはいそは方のはま蕉  
莖もくちしふ筒の部段末  
つれともあ初の護た乃行遊言  
四ツの知あよりはるて家の子角  
鼻つまむ星より見の生者末  
ありつよ負ぬ津のる扱蕉  
縄切くはまふはるる花かつく角  
きよとあふのまけりも言所言



増三君 日老清代未動をせり  
唐徒良國氏にけりまゝにす

後の方待まけり後アハ 芭蕉  
牡丹乃ととぬむ 庚 切 千川  
鏡表も月ハとぬ形一と 涼亭  
壁よりそぞく 琵琶と好と 左研  
言よりハまゝふむるのを録り 川

出とくまゝ 金山乃 砂 蕉  
吹笛も松も起さす 山 社 柳  
つれも葉のこまよる 増の表 葉  
大の子孔無きぬぬてき 肥 喜山  
稲すゝ白を借よる 修 川  
春の原を曹洞宗の夕つとる 蒼  
漱乃筆よりやま 月代 山  
中まゝの 柳ハ 輪ハ 地ハ 川  
筆を子出さるせハ 生 葉 柳  
巡礼乃かつりて 松のおく 蕉



見より見たり傳人報る蕉  
 空んんと暮る暮るを嘆り山  
 相へ梅へさつるあ髪紫  
 妻除路を乃青を思後り蕉  
 りり暮へとも片髪乃蛤筋  
 湯より乃浴衣下る間を待て  
 空の中より入るあ風柳  
 秋留子首乃紫子菊物て川  
 酒やの門を叩く月のお花  
 人夏の貴月引合ふごさ色ち舟

拾十三

必と務ましく空をこせたり  
 叢と日はあひし死所波  
 浮出さるるさりて蜂のま  
 陸人の空よ夫をを渡ひて  
 舟りか舟を門の合を舟  
 陸肉を空谷川迎を波乃声  
 ち舟りさるる休む舟を川  
 けまらぬ門をり子さ空の空  
 蟻のせいささゆる苗代波







車をうらひ漢もも歌の安んぬるなり  
 志らむをねかよひしとみのもたてし  
 ろくしき連綿のけさたも鳥羽む乃  
 くらられせをふくむのあかく法  
 てししらめやんまのをいし  
 一をかきししきもまのめん中たのを  
 る小くしき

いせ人ぬき庵の獲車

七拾段

京都書林

寺町通二條

楠屋野田治兵衛梓行





